

## 良い実践をなぞることから始めよう。そして、いずれは自分の教育成果と同じものを他の人が出せるようにしよう

¶ 「再現性」ということばを聞いたことがあるでしょうか。教育の現場で使うのであれば、ざっくりと

・他人の実践を見たり、読んだりして、なるべく環境が同じくなるようにして、その上で実践をなぞっていくと同じような教育成果が得られることが「再現」すること。

・自分の実践をリアルや文章などで伝えて、環境設定はこれこれこうでした。実態はこれこれこうでしたとして、それを見たり読んだりしてくれた人がアナタの実践をなぞると同じような教育成果が得られるということが「再現」可能な実践をしたということ。

という意味合いになります。

¶ 特に経験の元手もない駆け出しの頃は、ただただ流れていく教育活動に翻弄されがちですが、「教育効果」に注意しながら毎日を過ごさないと、「何も再現しようとしないうちが経っている」のであれば、

① 自分自身の学生時代に受けた定型発達向けの指導を元にして自己流で教育成果を出そうとしている

② なんの目標にも迫らず、活動ゴールの授業をしてしまっている

③ オリジナルの方法によって教育効果を出そうとしている

のどれかに当てはまることが多いのではないのでしょうか（しかも③は最初は難易度が高い）。

¶ 「再現性」と聞くと、ナントカ学会とかに出ていて、論文を読んでいる研究部の人のキーワードのような気がしますが、もっともっと日常に入り込ませると良いもので、

・この実践はワタシもなぞれるものなのか？

という視点で色々な実践を見たり聞いたりして、教育効果を再現できる「レシピ」をどんどん増やしていくと良いですね（まるで自分のクックパッドを作るかのように！！）。

¶ 「こーすれば、こーなる」「あーすれば、あーなる」。そんなにうまくは行かないよ…ということもおいですが、

・この教育効果を出したいのであれば、この実践をなぞると再現できる

とか

・あの教育効果を出したいのであれば、あの実践をなぞると再現できる

とかをもっともっと意識していけると、「教育効果」を出すことができるレシピがどんどん増えていくし、自分の周りの先生に実践を伝えるということも上手になっていくと思います。

¶ 「再現」を読み取ったり、伝えたりする際の注意点としては、「過程」についてだけを文才逞しく飾り付けながら書いて、「何が育ったか」は霧の中…みたいなものは参考にする上でも自分が伝える上でも NG です。再現を読み取る時も、伝える時も何が再現できるのかという 「教育効果」をはっきりとさせたもの、教育効果が得られるまでの環境づくりや方法がわかりやすいものを選んだり、そういうものにすることが大切です。

¶ 例を上げると、まずは悪い例として遊びの指導なんかは「子どもと同じ視点で遊ぶのがいい」とか

「いっぱい遊ぶ子はいっぱい学ぶ子になる」とか言われがちで、実際にそうやって遊ぶ先生は美しく見えるけれど「教育効果」はなんだろう？という切り口で見ると「??？」と、一気に霧がかってしまうことがよくあるように思います。他方で、例えばトイレトレーニングをする際に、トイレの周期を把握して、水分量を2倍～3倍に増やして、トイレは30分は粘ってみる。成功した時には好子を出して、3連続成功を1つの区切りとする。みたいなものは再現しやすいし、「3連続成功！」の時点で自分が、それを書いた人の実践を「再現できた」ことがわかるという、教育効果も明示されていて且つ方法もはっきりとしているもののいい例に当たると思います。

「駆け出しの頃はついつい活動自体の「うまくいった」「うまくいかなかった」に目を向けがちになってしましますが、「ワタシはどのような教育効果を出そうとしていて、そのためにはどんな先行事例を再現していけばいいのか？」なんて視点で自己研鑽を重ねる…なんていうこともいいのかもしれないね。